

佳作

ツバメと僕

静岡県 静岡市立長田南中学校一年 片桐 脩真

六月中旬ごろの朝、僕の通う中学校への通学路に、二羽のツバメが空を飛び回っていました。次の日には、そのツバメが土やどろをくわえながら、またも空を飛び回っていました。その日の帰り道、通学路の横に建っている建物の柱に一つのツバメの巣ができていて、その巣の中には、二羽のツバメがいました。それから何日かたったある日、

「ピーピー。」

と、鳴き声が聞こえたので、巣を見てみると、そこには四羽のヒナがいたので。まだ小さく、毛がモフモフしていて、目が開いていないヒナに、僕は見とれてしまいました。それから僕は、その道を通るたびにヒナを見るようになりました。

ツバメにとって一番辛く、厳しい時はヒナの時です。カラスやヘビ、猫に食べられたり、巣から落っ

こちたりするからです。実際に半年後の渡りの季節までに生き残るのは、約十三%と言われています。そんな危ない環境でもツバメは、一生懸命生きていくのです。それを知って僕は、毎日ヒナを見て、食べられてはいないか、落っこちていないかと確認をするようになりました。その後、ヒナたちは、毛がさらにモフモフになり、目をまん丸に開いて、体も巣からはみだしたり、ヒナの上にヒナがのったりするぐらい大きくなっていました。僕は親でもないのに、ヒナたちが大きくなっていくのを見て、うれしくなりました。それと反対に、巣立ってほしくないという気持ちもありました。

そして何日かたったある日、ヒナたちが空を飛び回っていたのです。ツバメは何回も、飛行の練習をしたり、えさのりの練習をしたりして、大丈夫だと自信がついたら十月頃にフィリピンやオーストラリア北部へ越冬のために、飛んでいくと言われていきます。ヒナたちは、その飛行の練習をしていたのです。僕はそのとき、うれしくなりました。

その何日かたったある日、巣には二羽しかいませんでした。二羽が巣立ったのです。それに続くように、あとの二羽も巣立っていきました。僕は少し悲

しかったけど、あんなに小さくてピーピー鳴いていたヒナたちが一人前になって巣立っていったことに感動しました。太平洋の空を渡って遠くの国へ行ってしまうけど、またあの巣にもどってくることを願っています。

僕はまだ鳥というヒナなので、一人前になって巣立つために、ツバメを見習い、勇気をだして色々なことに挑戦し、色々なことを学ぼうと思います。そして、自分に自信を持って、人生を歩んでいこうと思います。